

英文多読トレーニングを授業に導入する際の疑問について

—「やさしい英文では意味がない」のか？—[†]

国際教養学部英語コミュニケーション学科准教授 貞光 宮城

1. はじめに

英語リーディングの授業において多読トレーニングを導入し実施している。これは筆者のこれまでの英語教育（特に購読や読解の授業において）の経験を顧み、模索し、現在のところ、たどり着いたものの1つである。本稿では、現在実施している多読トレーニングについて、一般に抱かれる疑問（そして実際に頂戴した質問）である、「なぜやさしい英文を読むのか」に焦点を当てて議論する。多読トレーニングに対する誤解を解消し、その目指しているものが何なのかをより広く、そして深く理解してもらうことが本稿の目的である。

2. 現状と問題点

2.1. 多読トレーニング導入の現状

追手門学院大学国際教養学部英語コミュニケーション学科において、著者の担当するリーディング授業で多読トレーニングを導入して、2010 年度以来 4 年目になる¹⁾。この間、およそ 120 人以上の学習者に実践してもらったことになる。

基本的なトレーニング方法としては、まず、授業時間内に読む書籍を、毎回図書館で学習者が自分で選び、2、3 冊以上必ず授業に持参してもらう。それを授業中に制限時間を設けて黙読する。その間は一切読むこと以外の作業は行わない（Sustained Silent Reading；SSR）。さらに課題として授業外においても毎週最低 2、3 冊以上の書籍を自分で読むことを課している。これらの活動による読書記録を手帳にメモし、最終的にそれをインターネット上の読書記録サイトに入力してもらい、指導者（筆者）が各学生の読書状況を個別に把握できるようにしている²⁾。そして、本稿で最も問題となる点が、筆者が学習者に極めてやさしいレベルの英文書籍から（大量に）読み進めるように奨励していることである³⁾。

2.2. 問題点：一般の教員が抱く疑問

こうした多読トレーニングを授業中に行うことに対して、一般の英語教員が抱きがちな疑問（あるいは疑義といってもよい）がいろいろとある⁴⁾。その中でも本稿では、前節の最後に触れた（そして実際に著者自身も直接寄せられた）、筆者が指導・推奨している書籍は「大学生にはやさしすぎるのではないかな？」という問いに対して論じていく。それはつまり、語彙力増強の点においても、文法的な事柄を学習・復習する点においても、「そんなやさしいものを読んでも学ぶことはないのではないかな？」「意味があるのかな？」というこのトレーニングの目的に対する疑義についてである。

3. やさしい英文から読み始めることの目的と意義

3.1. 一般的な議論

前節の最後で掲げられた疑問・疑義に対する筆者の結論は、当然、多読トレーニングにおいて極めてやさしい英文から読み始めることに「大いに意味がある」である。では何故そうなのかを、この節では、多読トレーニングの目的に対する理解に大きなずれがある点について論じていく。

極めて重要でありながらほとんど見落とされている点に、前節のような疑問・疑義を抱く教員（以下、こうした考え方の教員を便宜的に「従来の教員」と呼ぶ）には多読トレーニングの目的自体を十分に理解してもらっていないということがある。学習者が英語を身に付ける上でできるだけ大量の英文に触れる（読む）べきであるという点については同意しない教員はいないであろう。そこで従来の考え方の教員は、多読について次のように考えてしまうのである。つまり、同じ読むのであれば、多くの未知の語彙に新たに出合えるようなものを読むべきであり、そうしてその語彙を覚えていくことによって語彙力が向上するはずである、と。

この点において、多読の目的を理解した上で授業に導入している教員（以下、こうした教員を便宜的に「多読教員」と呼ぶ）の考え方とは大きな隔たりがある。つまり、従来の教員が言う「多くの未知の語彙に新たに出合えるようなもの」はそもそも学習者は到底それを「読む」ことができない。従来の教員は多読に対してこの事実を見落としているのである⁵⁾。「読めない」ものを読み進む程、苦痛なことではない。これを教員からの強制力で学習者へ強いても、その学習効果は期待できない。学習の上で最も重要な意欲が削ぎ落とされているのであるから当然である。読めないから分からない。分からないからつまらない。つまらないから読みたくなる、読みたくないから読むのを止める、……と悪循環を引き起こす。いきなり無理を強いるため、学習者は挫折するのである。その結果、当初の目的であったはずの、できるだけ大量の英文に触れて英語を身に付けることはできなくなってしまうのである。

一方、多読教員はこうした考え方を取らない。多読の目的を、何かを「学ぶために読む」と考えるのではなく、「読み方を学ぶ」トレーニングであると考えている。つまり、英文を自分の力で読める

ようになるための練習であると考えるのである。もちろんこの「読む」というのは辞書を引き引きゆっくりと時間をかけて読むというものではない。かなり高い理解度で、軽快にどんどん読み進む活動のことを意味する⁶⁾。この「読む」活動を英語でできるようになるためにトレーニングするからこそ、やさしい英文から始めなければならないのである⁷⁾。

多読トレーニングは、長期的な目標（教育計画）を想定した上で授業に導入されるものである。従来の教員が考えるような、未知の単語（あるいは覚えることが期待されている単語）に出合ってそれを覚えていくというような即時的な（誤解を恐れずに言えば、短絡的な）ものではない。多読トレーニング自体の目的は「読めるようになるための訓練」であり、そのために学習者に合った、よく理解できる（やさしい）英文から始め、それをすらすら読み進める。よく分かるから楽しい。楽しいからさらに読める、……という継続的な好循環を意図し、学習者が自ら自主的かつ自律的に学習を進めていくことで、英語による言語処理の自動化を目指している。その結果、言語習得に最も必要な（そしてたいへんな労力を要する）大量の目標言語に接することが可能になるのである。つまり、従来の教員が目的としていたような、語彙力の増強や文法事項の学習は、多読トレーニングの直接的な目的ではなく、むしろ多読トレーニングによって英語による言語運用能力が向上した結果として、付随してくる産物なのである⁸⁾。

ではその「付随してくる産物」として英語の語彙力の向上や文法知識の増強をただただ期待するだけで、本当に多読トレーニングを実施することで得られるものなのか、学習効果が本当にあるものなのか、とさらに疑義を挟む向きもあるかもしれない。日本においても多読トレーニングを授業に導入する教育機関がここ十数年の間に増加してきた。それらの結果をご覧いただければ明らかである。中でも特に良く知られた教育機関としては豊田工業高等専門学校の事例が顕著である（吉岡・西澤（2003）、吉岡・西澤・伊藤（2004 a）、吉岡・西澤・伊藤（2004 b）、西澤・吉岡・伊藤（2007）他を参照⁹⁾）。元来、英語を得意としない学生が集まることが多いこの理系の教育機関において、2002 年度から Start with Simple Stories 方式の英語多読を開始し、それまで TOEIC の平均点も他の工業高等専門学校と大差なく 350 点程度であったものが、5 年一貫教育の後、2007 年度には四年制大学の平均を上回り、500 点を超えるまでに至っている。そしてこれは、「必死になって TOEIC の得点を上げるための勉強を学生にさせていた時には実現しなかったことである」とのことである。

3. 2. 追手門学院大学の担当授業における成果

それでは、追手門学院大学において 2010 年度以来実施してきた筆者の担当授業では、その成果はどれほど得られたのかということが、次に問われることであろう。担当授業では、毎学期の最初と最後に「英語語彙サイズテスト」¹⁰⁾を実施してきた。各年度ごとの変化は表 1 の通りである。

表1 語彙サイズの平均（語）

年度（クラス人数）	春学期開始時	秋学期終了時
2010年度（1回生36人）	2897	3161
2011年度（1回生30人）	1409	2453
2012年度（1回生34人）	2789	2895
2012年度（2回生32人）	2665	2482
2013年度（1回生34人）	2499	2880*
2013年度（2回生29人）	3441	3559*

（ただし、*は秋学期開始時のテスト結果）

各年度やクラスによって変動があるが、概ね多少の語彙力の向上を見ることができると言えるかもしれない。もちろんこれはどれも目覚ましいほど劇的な飛躍という訳ではない¹¹⁾。しかしながら、これは学習効果がないのではなく、筆者の見解としては、（未だ）表に現れて来ていない段階であると考えられる。というのも、多読トレーニングは長期的な教育計画を想定しており、上述の豊田工業高等専門学校の実例においても、5か年一貫教育による継続的な取り組みがあって達成されたことである。筆者の担当授業の結果は、半期（実質的には4か月弱）の学習を春学期と秋学期で実施した単年度によるものである。つまり、ようやく英語に目が慣れ始め、英文を「読む」ことに慣れてきたところでトレーニングを終了する（せざるを得ない）のである。そのため、はっきりと数値に現れるようなかたちでの学習効果をとらえることができないと考えられる¹²⁾。

ここで強調しておきたい点がある。それは、たとえ数値に現れるようなかたちでの学習効果が見えにくいとしても、数値には現れないようなかたちで、単年度であっても多読トレーニングの学習効果がはっきりと見て取れる部分が確かに存在するということである。それは、学習者の英語学習に対する動機付けの劇的な変化である。多読トレーニングを実践した学習者は、上述したような好循環によって、自ら読み進めていくということを実践し、自ら学習を進めて行こうとする内的な学習意欲の向上が極めて顕著に見られる¹³⁾。以下は、学習者の生の声の一部である¹⁴⁾。

- ・多読のおかげで単語一つ一つ訳さずに文全体を見てどういうことを書いているのかがすぐに分かるようになった。
- ・この場面でこの言葉を使うのかとか単語の意味とかが学べた。
- ・あ！この単語、表現、あの本で見た！ってのがたまにあり、自分が成長したという実感がわいていいと思います。
- ・読む速さの変化を感じた。
- ・読むスピードがついてよかった。単語の語彙数もふえたと感じる。
- ・単語の意味が分からなくても文脈で判断できて、そこからちゃんと覚えられて良いと思います。

す。

- ・「英語を読む」ということがあまり好きではありませんでした。しかし、多読はコツコツ貯めていけて、記録手帳に残るので、達成感がありすごくいい。
- ・英語を読む機会が増えたのでありがたかった。
- ・長い英文を読むのが嫌いじゃなくなった！ すらすら読めるからたのしい！
- ・本を読む楽しさが、すごく分かった。
- ・英語を英語で理解する力がついた。
- ・自分から本を選んでもうから、自主性があってよかった。
- ・自然に英語の本を読むようになりました。
- ・簡単な英文だったのでスラスラ読めたし、おもしろかった。

こうした自律的な学習意欲に関する内的な変化は、残念ながら、従来の、学習者全員が共通のテキストを、教員の解説を元にして読み進むような方法の授業ではなかなか得られるものではない（少なくとも、著者が学習者の側であった時も含め、従来の授業スタイルでの経験ではほとんど得られなかった）ものである。この点は、極めて重要な点である。なぜなら、学習者の学習に対する動機付けを向上させることほど困難な（そして肝心な）ことはないからである。多読トレーニングが、上述の好循環を生み出すからこそその効果であると考えられる。

4. まとめ

本稿では、多読トレーニングにおいてやさしい英文から読み始めることが学習者にとっていかに大切かを論じた。「大学生にもなってやさしい英文を読んでも意味がないのではないか？」といった疑義を抱く従来の教員からの質問に答えることができればと願っている。誤解がないように記しておくが、辞書を引きながら読み進む精読に全く言語学習の効果がないと言っているのではない。「多読」トレーニングを行うのに、そのような読み方をする（しかできない）書籍は目的に合わないと言っているのである。言わずもがな、やさしい英文は学習者にとってゴールではなくスタート地点である。学習者の目標はそのずっと先にあるのである。そこで先を急ぐばかりに（あるいは目の先の語彙力が向上するのではないかと欲をこめて）、自分の読む力を遥かに超えたものを読み進めようとしても、長くは続けられない。挫折し、その書籍を読むのを断念するばかりか、英文を読むこと自体をあきらめてしまうことになる。やさしい英文は、「読める」ようになるための極めて大切な出発点なのである。

確かに、問題点もある。やさしい英文で書かれた書籍は子ども向けのものがその多数を占め、大学生には内容が幼稚すぎるのが往々にしてある。その結果、つまらなく感じることもある。その時はすぐに次の書籍へ次の書籍へと進んで行くことによって、楽しめるものを見つけていってもら

いたいと指導するのであるが、多読トレーニングに慣れないうちは、実はこれはたいへん難しいことなのである。また、学習効果が数値に現れるようなかたちで目に見えるようになるまでに長期間の継続的なトレーニングが必要となるため、学習者自身がその効果をしっかりと実感できるまでにはある程度の時間を要することが多い。そのため、本稿でも多読トレーニングの定量的な学習効果をはっきりと明示できたとは言えない状態に留まっている。さらに、日本語でさえ「読む」こと自体に苦痛を感じるという学習者もあり、そうした学習者にとっては、長期間のトレーニングは楽しむ以前に至難の業となる。これは英語の学習の枠を超えた、学習習慣そのものの問題ということにもなる。

本稿で論じたのは、多読トレーニングにおいて何故やさしい英文から読む必要があるのかという点のみである。これ以外にも、多読トレーニングを授業で実践していく上で、様々な疑問を抱かれており、そのいくつかは承知している。たとえば、何故授業中に多読を行わなければならないのか。実際の授業での教員の役割はどうなるか。学習者の評価をどのように行うべきか、などである。また、現在、筆者が実施している多読授業自体についての問題点の検討も行う必要がある。こうした点については、また稿を改めて議論したい。

註

† 多読トレーニングの実施に際し、また本稿を執筆するにあたり、様々な方々のご尽力をいただいた。中でも Linda Wiswat 氏には多読について多岐に渡り議論させていただいた。Ross Eric Miller 氏には筆者の授業を参観してもらい、貴重なコメント・アドバイスを頂戴した。中条貴夫氏には、この多読トレーニングに欠かすことができない「読書記録サイト」を、全面的な協力を得て構築・保全していただいている（中条（2011）を参照）。ここに記して感謝の意を表したい。

- 1) 導入当初は、トレーニングに必要な英文書籍の数自体も全く不十分であったが、追手門学院大学附属図書館の協力を得て、ようやくある程度までは学習者の要求に答えられるまでに至った。著者の依頼により購入していただいた書籍は 2,000 冊を超える。また、図書館内に English Learning のコーナーも設置していただいている。
- 2) この「読書記録サイト」においても、様々なトレーニング目的に応じた独自の機能を持たせてあるが、紙幅の都合により、ここでは論じない。
- 3) 具体的なレベルとしては、高く YL 0.3~0.4 辺り（もっと低いものを選んでも良い）から読み始めるように指導している。YL については古川（2010）などを参照のこと。
- 4) 読書量や読書速度の目標設定についてや、評価の問題、さらに指導者の授業中の役割についてなど、多岐にわたるが、ここでは論じない。
- 5) 「読む」という活動自体の理解にも、従来の教員と多読教員との間で乖離がある。従来の教員は、未知の語彙に多く出合うような英文であっても、1 文を理解するのに辞書を何度も丁寧に引いて行けば「読める」と考える。しかし、多読教員は、そうした活動は暗号解読であり、自然な流れの中で理解しながら進めていく「読む」活動とは考えない。そうした授業は単に教員が解説を行っているだけで、学習者自身が読書活動をおこなっている訳ではないと考える。
- 6) Nation（2001）によると、こうした多読活動が可能になるには、学習者にとってその文章が以下のような条件に合うようなときであると指摘している。

Extensive reading can only occur if 95-98% of the running words in a text are already familiar to the learner or are no burden to the learner. . . . The degree of comprehension was predictable from the density of unknown words

=====

and the optimum density was 98%. That is no more than two words in every 100 running words should be unfamiliar to the reader. (Nation 2001: 2, 下線筆者)

- 7) この具体的な難易度については、Extensive Reading Foundation (2011) に以下のように記してある。「日本人学習者の場合、多読の初期は、分速 80-120 語と言った速度で読めるものから始めるのが現実的でしょう」 (Extensive Reading Foundation 2011: 3)
- 8) この点は、何かを覚えるためだけに勉強を強いる授業や、文法事項の仕組みをひたすら教員が説明・解説するだけに終始する授業を(筆者自らの過去の授業のあり方も含め)反省するものである。
- 9) その他にも、成蹊大学、近畿大学、東北大学など、多読トレーニングを授業に導入した結果の報告がなされている。
- 10) 詳細は望月他(2003)を参照。
- 11) 対象学習者は国際教養学部の特修英語科目の受講者であり、英語関連科目としては、筆者が担当するリーディングクラスだけを受講している訳ではない。つまり、多読トレーニングのみの学習効果という訳ではなく、その他の英語関連科目における学習の成果も含まれることになる。
- 12) 多読トレーニングを大学在学中の4年間継続して行うことができるような仕組みを整えば、英文を「読む」力を身につけた上で、それに付随する学習効果の1つとして顕著な語彙力の向上が必ずや見られるであろう、というのが筆者の見解である。
- 13) 当然のことながら、担当クラスの学習者が一人残らずというわけにはいかない。英文を読む以前に、和文でさえも読むこと自体に抵抗を示し、読む習慣そのものが身に付いていない者もいる。
- 14) 2013 年度春学期 2 回生クラス(29 人)で学期末に実施したアンケートにおいて、多読トレーニングについての以下の問いに対しての結果は平均 4.20 であった。
「英語力向上に効果が感じられたか？」
5. 強く感じられた。
4. 少し感じられた。
3. どちらともいえない。
2. 全く感じられない。
1. 逆効果であったと感じる。

参考文献

- Calkins, M. Lucy (2001) *The Art of Teaching Reading*, Longman.
- Day, Richard and Julian Bamford (1998) *Extensive Reading in the Second Language Classroom*, Cambridge University Press.
- Eichhorst, Daniel and Ben Shearon (2013) *The Tohoku University Extensive Reading Manual*, Center for the Advancement of Higher Education, Tohoku University.
- Extensive Reading Foundation (2011) 「国際多読教育学会による多読指導ガイド」
http://erfoundation.org/ERF_GuideJ.pdf (2013 年 12 月 30 日参照).
- Krashen, Stephen (2008) "The Comprehension Hypothesis Extended," in T. Piske and M. Young-Scholten eds. *Input Matters in SLA*, Multilingual Matters, pp.81-94.
- Nation, Paul (2001) "Planning and Running an Extensive Reading Program," *NUCB Journal of Language Culture and Communication*, 3(1), pp.1-8.
- SSS 英語学習法研究会 (2009) 『読書記録手帳』コスモピア株式会社.
- Takase, Atsuko (2012) "The Effectiveness of Sustained Silent Reading in Becoming Autonomous Learners," *Forum for Foreign Language Education* 11, pp.1-14, Faculty of Foreign Language Studies, Kansai University.
http://jera-tadoku.jp/papers/2012-08-Takase-Kansai_Univ_Forum%20.pdf (2013 年 9 月 30 日参照).
- Takase, Atsuko (2013) "The Impact of Extensive Reading on Reluctant Japanese EFL Learners," *The European Journal*

http://jera-tadoku.jp/papers/2012-Impact_of_ER_EJALT_takase.pdf (2013 年 9 月 30 日参照).

http://jera-tadoku.jp/papers/08_toyota_itou.pdf (2009年3月30日参照).

酒井邦秀・神田みなみ（2005）『教室で読む100万語』大修館書店。

高瀬敦子 (2010)『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店.

西澤一・吉岡貴芳・伊藤和晃 (2007) 「苦手意識を自信に変える、英語多読授業」

<http://jera-tadoku.jp/papers/nishizawa-2007-03.pdf> (2009 年 3 月 30 日参照).

古川昭夫 (2010) 『英語多読法』 小学館.

望月正道・投野由紀夫・相沢一美（2003）『英語語彙の指導マニュアル』大修館書店。

吉岡貴芳・深田桃代 (2008)「学校を越えて英語多読学習を支援する. Web 読書記録手帳と自動図書推薦システムの開発」

http://jera-tadoku.jp/papers/yoshioka_20080708.pdf (2013 年 12 月 30 日参照).

吉岡貴芳・西澤一（2003）「英文多読による個別自律学習の指導」

<http://jera-tadoku.jp/papers/20030828yoshioka.pdf> (2009年3月30日参照).

吉岡貴芳・西澤一・伊藤和晃（2004 a）「英文多読による個別自律学習の指導とその評価」

<http://jera-tadoku.jp/papers/20040826yoshioka.pdf> (2009年3月30日参照).

吉岡貴芳・西澤一・伊藤和晃 (2004b) 「英文多読による読解力評価方法」

<http://jera-tadoku.jp/papers/20050825voshioka.pdf> (2009年3月30日参照).